

10. 知的障害をもつ人の地域生活の拠点「ぷらっと」（奈良県上牧町

社会福祉協議会）

奈良県上牧町は、奈良県の北西部に位置する人口2万5千人（2006年3月）のゆるやかな丘陵地帯にある町。大阪市・奈良市へは、20～25キロと通勤圏にある。このため子育てをしている比較的若い世代が多く、高齢化率は16.3%と全国平均より低い。

■上牧町社協の障害者レスパイト事業

上牧町社協では、2000年に保健福祉センターの運営を受け、それに伴い職員も増員され、多様な事業展開を進める基盤ができてきたなか、障害者や児童の問題に着手しようとする試みが始まった。その障害者支援プログラムがレスパイト事業である。

上牧町社協の障害者レスパイト事業は3つの事業からなる。

1つは、障害者が地域生活をするうえでのさまざまな社会経験の機会を提供することを目的とした「レスパイトサービス」。2つめは、レスパイトサービスの際に利用者の支援者として活動するボランティアの養成を目的とした「レスパイトリポーター養成講座」。3つめは、障害者とその親の関係を見つめなおす「親と子のつどい」である。

また、この活動から派生して、障害者が「自分たちの暮らしについて自分たちで話し合い、自分たちで決める」ということをテーマとした本人活動支援などが実施されている。

上牧町社協における障害者レスパイト事業は、2002（平成14）年、隣の河合町社協と合同で始めたのが最初である。レスパイトというと、障害をもつ子どもなどを一時的に預かることで家族に休息を提供するといったイメージがあるが、上牧町の「レスパイト事業」は家族

支援よりもむしろ、知的障害をもつ人が自分らしく生活するための本人支援をめざすことを当初から目的としていた。

レスパイトの登録者は20名、この活動を支える有償ボランティアであるサポーター登録は33名になる。このレスパイト事業は、養護学校卒後に出かける場所や同世代の人との関わりが少なくなることから、月1度みんなで交流する場を設けようということで始めた事業で、本人の余暇・社会活動支援として、調理や外出といった活動を行っている。20代が中心で40代くらいまでの青年が中心。余暇活動以外に、サポーターの養成や親子関係を考える「親と子のつどい」を年2回行っている。

そのなかで、当事者たちが大きく変わるきっかけとなったのが、2004年2月に行われたファッションショー。レスパイト事業1周年を記念して、もっと多くの人に知的障害のある人のことを知ってもらおうと企画されたものだ。近隣のデザイン関係の専門学校生等からの協力も得て、170人以上の観客を集め大成功を収めた。その後、またショーに出たいという声が上がったことをきっかけに、今度は親や支援者が中心になるのではなく、自分たちのやりたいショーを作り上げてみたらどうかと事務局が働きかけたところ、当事者が主体となった実行委員会が立ち上がった。そして7回の実行委員会を重ねて、2006年2月、第2回目のファッションショーが開かれた。この成功が自信になって平成18年の4月からは当事者による「レスパイトを考える会」が立ち上がった。毎月何をするかをここで話し合っている。

■地域生活支援センターぷらっと

このように、社協による障害者本人支援の取組が強まるなかで、上牧町社協の運営する知的障害者のための「地域生活支援センターぷらっと」は、平成17年9月にオープンした。

市街地を通る交通量の比較的多い幹線道路脇にある車で立ち寄れる2階建て長屋のように数件の店が連なる一角に「生活支援センターぷらっと」は誕生した（平成19年5月より町障害者福祉センターに移転）。喫茶店「カフェぷらっと」は、木の素材を生かしたカントリー風のおしゃれなつくりの店。ドアを開けると店内で働く障害者が「いらしゃいませ」と迎えてくれる。店内は、カウンターのほかに4～5人が座れるテーブルが5つ、軽快なポップスが流れる店内では、2人の障害者が接客を担当し、カフェぷらっと専任の社協職員が、カウンターの中で2人が接客する様子を見守っている。

1人の障害者は、ほかの日は他町にある作業所でペットボトルのリサイクルの仕事をし週1回、バスを乗り継いで隣町から通ってきているとのこと。注文をとりまわたり、テーブルへお皿を運んだりとなんでもこなす。ここでの経験を生かし、一般就労することが目標となっている。もう一人は、ここへは週2回自転車で通い、それ以外の3日は隣町で一般就労として清掃の仕事をしている。こここのところ不況で仕事が減っていることが悩みだという。

ここはいわゆる一般就労の場ではないが、かといって福祉作業所とも違う。知的障害のある人が、アルバイトをしながら一般社会と出会う場であり、また、障害のある人たち同士の交流の拠点として作られたものでもある。外からはまったく普通の喫茶店に見えるため、何も知らずドアを開けるお客さんも多い。ここはお客さんにとっても知的障害のある人たちと直に接する場になる。

最初は、知らない人と接することは苦手だったという障害者も、今はここの仕事が面白いという。時には、飲み物をこぼして、お客さんから叱られることもある。こういう体験は施設や

作業所ではなかなか出会えない。「ここは知的障害者と一般の人の双方が初めて出会う場です。施設等では職員が対処してきたことに本人が直面します。これが社会なんだということを知るきっかけにしてほしい。どうしても、という事態にならない限り、なるべく介入しないようにしています」と社協職員は言う。

いつでも誰でもが、ぷらっと立ち寄ることができる場、そんな拠点になってほしいという意味をこめて、店の名は「カフェぷらっと」と名づけられた。

常連の人たちも増えてきた。障害のある人ががんばって働いている店と知って、毎日のように珈琲を飲みに来る人やお互いが顔見知りになって言葉を交わすようにもなってきた。平均して6組程度のお客さんが来、売上は1日7000円くらい。忙しい日は15000円にもなる。

カフェぷらっとは、月～土の9時～16時までの営業（定休日は日曜日と第3土曜）、プラットで働くメンバーは14人（男性7人・女性7人）が登録し、ローテーションを組んで2、3人のメンバーと職員の態勢で毎日の業務をこなしている。メンバーに支払われる賃金は時給200円、6時間働いて1200円になる。この金額は、近隣の作業所よりやや高い。

この事業は上牧町社協の単独事業だ。当初は、社会参加という目的でデイのメニューとして個別給付の対象にして支援費を財源にと考えていたが、就労と日中活動を分けるようにという県からの要請もあり、社協独自の事業として実施することになった。

補助金等は一切なしなので、財政的にはかなりきびしいことになっているのが現状だ。毎月の家賃が17万円、それにプラス水高熱費、材料費、メンバーの賃金等で、毎月35万円の出費になる。しかし、肝心の売上のほうは、月に18万円程度にしかならない。単純計算でも毎月16万円の赤字が積み重なっていくことになる。もともと収益を上げることが目的の事業ではないとはいえこのまま赤字を重ねていくこ

とは、社協理事会でも検討課題となり、19 年 5 月に移転することとなった新しい取組として古本喫茶を始めることとしている。

